

らいぶらいいにゅーす2018

～ 教職員版

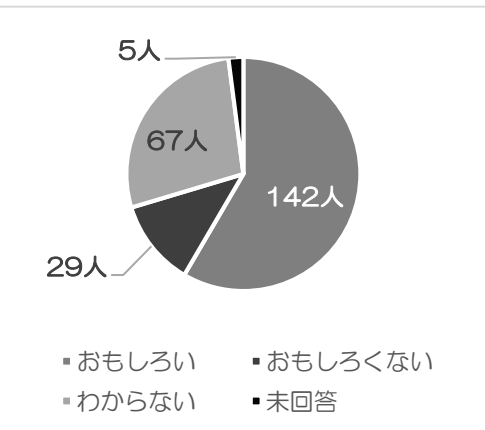
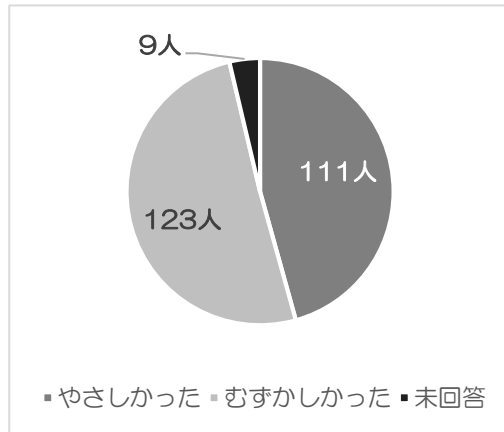
◎ 2018年も残すところあと一月半です

秋の高体連期間中にも「読書の時間」を設け、生徒に本を読んでもらいました。監督の先生方、その他関係の先生方、何かとご協力いただきありがとうございました。今回、1年生には「君の臍臓を食べたい」、2年生には「ソフトボーイ」の一部をそれぞれ読んでもらい、3年生には”自由読書”と題し、4冊の課題図書の中から1冊を選び、本を読み進めてもらいました。

以下、生徒を対象に実施したアンケートの集計結果です。

Q1. この話は…

「やさしかった」と答えた生徒が春期のアンケートでは過半数を超えていたのですが、今回のアンケートでは「むずかしかった」と答えた生徒の方が多い結果になりました。特に「むずかしかった」と答えた生徒が多かったのは1年生ですが、感想文を見ていると「続きが読みたい」と答える生徒が多く、続いて多かった3年生でも集中して読書に取り組んでいたようなので、難易度設定はこれぐらいの方が良いのかな？という気がします。

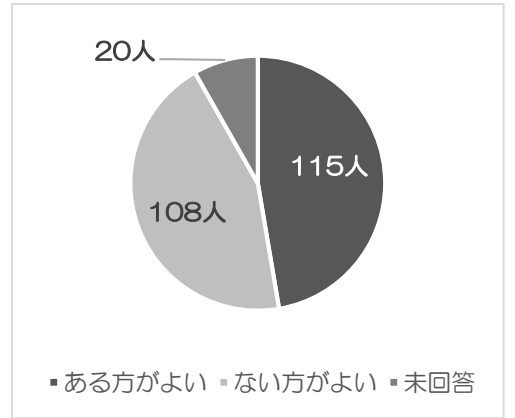


Q2. この話は…

「わからない」と答えた生徒の割合が春期の約2倍に増加。これは、Q1.で「むずかしい」と答えた生徒の割合の増加が招いた結果であると考えます。とりわけ3年生で「わからない」の回答割合が高かったのですが、Q1.でも述べたように、比較的集中して読書に取り組んでいた（積極的に内容を理解しようとしていた）ようなので、やはり難易度設定はこのぐらいが適切であると考えます。

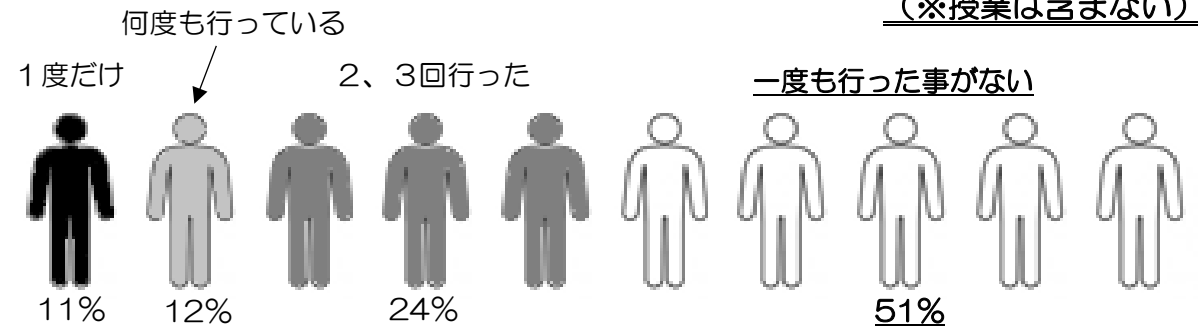
Q3. これからも「読書の時間」が…

春期とほぼ変わることはなく、若干数ではありますが「ある方がよい」と答える生徒の方が多いという結果に。注目すべきは3年生での解答割合で、「ある方がよい」と答えた生徒が、「ない方がよい」と答えた生徒の約2倍に上ったことです。尚、未回答の多くは「ある方がよい」と「ない方がよい」の間の点に〇をつけている生徒で、そう答えた生徒にどうやったら「ある方がよい」と確実に思ってもらえることができるかを考えることが課題です。



Q4. (今年の4月～) 学校の図書館に行ったことはありますか？

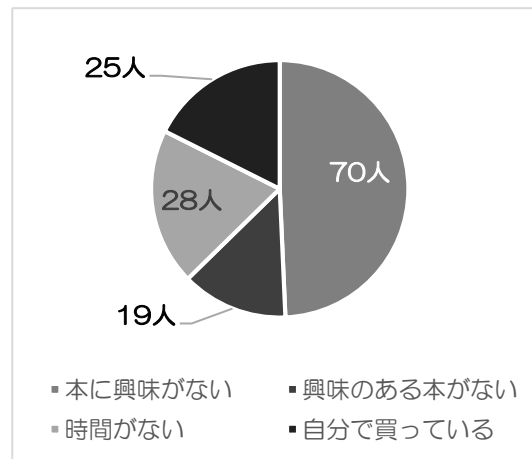
(※授業は含まない)



イメージしやすいように上のような図を作ってみました。全校生徒の中から無作為に10人選んだとき（単純計算だと）このような割合になります。半分は授業時間以外で一度も図書室を訪れたことがないという結果になったのですが、反面、半分は図書館を利用してきているという事実もわかりました。学年によりバラつきはあったのですが、1年生で「0回」と答えた生徒が2/3を超えていたことが気になりました。上級生が多いと行きづらく感じてしまうのでしょうか？「0回」と答えた理由について、次の質問で見たいと思います。

Q5. 図書室に行かない理由

やはり「本に興味がない」と答えた生徒が約半数を占めています。その他の理由としては、「他にしたいことがあるから」「友達といるから」等の読書に対して消極的な理由から、「家で本を読むから」「読むのは楽しいけど読む気が起こらない」等の読書に対してはむしろ積極的な理由までありました。この結果を踏まえ、読むのは楽しいと感じている生徒に読む気を起させるような図書館運営を心掛ける必要性を感じました。



（裏面：感想文 →）

感想文

○「君の臍臓を食べたい」住野よる/著（1年）

➡ある日、高校生の僕は病院で一冊の文庫本を拾う。タイトルは「共病文庫」。それは、クラスメイトである山内桜良が密かに綴っていた日記帳だった。そこには、彼女の余命が臍臓の病気により、もういくばくもないと書かれていて――。



私が一番心に残ったのは、「肝臓が悪かったら肝臓を食べて、胃が悪かったら胃を食べてって、そうしたら病気が治るって信じられてたらしいよ。だから私は臍臓を食べたい」です。心に残った理由は、この話の最初から最後まで山内桜良が死にたくないとか長生きしたいと書かれていなかったけど、このセリフを言った時だけは実は死にたくないという気持ちが出たのではと思ったからです。

山内桜良は病院で僕に「共病文庫」を見られてしまった時も、見られたあとも常にニコニコしていて、私は大丈夫だとも言っているような感じなのに、フザけて言ったとしてもそれが山内桜良の、もうすぐ死んでしまう人の本心じゃないかと思わせるには十分なセリフだと思ったのも理由の一つです。

なので私はこのセリフが一番心に残りました。（1-3）

○「ソフトボーイ」関口尚/著（2年）

➡ある日、県内に男子ソフト部が1校もないことに気づいたノグチは思いついてしまった。「部さえ作れば即全国大会出場決定！」<ヒーローになれる&モテる>というこの上なく不純な動機で始め、男女比1:9という極端に男子が少ない学校で苦労して集めた部員はキャッチボールすらまともに出来ない素人集団で――。



私は「そろそろ俺たちのユニホーム作っとけよ」と言った所が心に残りました。ユニホームを作るという事は、九人ちゃんと集められる自信があるんだなと思ったからです。女子生徒が多く、男子は三十人しかいなくて、それにすでに部活動に入っている生徒もいたりするのに強制的にチームに入れる野口君はすごいなと思いました。

男子ソフトボール部を創設すると思いたったのは、やった事があるとか、楽しそうだからでもなく、マイナーであり全国大会に出場しやすいから、だから佐賀県のヒーローになれると単純な思いでここまでいろんな人を動かしてこれたのは自分だったら出来ていないと思うのでそんけいします。甲子園に刺激して行動に表したのもすごいと思うし、佐賀県を有名にしたいのかなとも思えるし、私もこの野口君みたいに心に閉さず、思った事は実行してみたいと思いました。

全員が初心者だったり、運動が得意じゃない人の集りたつたとしても、みんなでおしえ合えばチームの絆も強まると思うし全国に行けなかったとしても、いい思い出になると思うので、この高校の男子生徒にはぜひ入部してもらいたいと思いました。（2-2）

○「つめたいよるに」江國香織/著（3年）*

➡デュークが死んだ。わたしのデュークが死んでしまった――。たまご料理と梨と落語が好きで、キスのうまい犬のデュークが死んだ翌日、乗った電車ではわたしはハンサムな男の子にめぐりあった……。出会いと別れの不思議な一日を綴った『デューク』。デビュー作『桃子』等を含む21編を収録した初々しい短編集。



「今までずっと、僕は楽しかったよ」という言葉が印象に残った。

自分がかっていた犬がなくなってしまって、悲しんでいる時に現実にはおこらないけど、犬が人になってかいぬしに思いを伝えにくる。っていうのはありきたりやけどおもしろいし、感動するなと思いました。

本は現実の世界ではおこらないような物語を頭の中でそうぞうしながら読めるからいろんな世界観があっておもしろいなと思った。（3-2）

○「あん」ドリアン助川/著（3年）*

➡町の小さなどら焼き店に働き口を求めてやってきたのは、徳江という名の高齢の女性だった。徳江のつくる「あん」は評判になり、店は繁盛するのだが…。壮絶な人生を経てきた徳江が、未来ある者たちに伝えようとした「生きる意味」とはなにか。深い余韻が残る、現代の名作。



心に残った箇所は「店長がお客なら、並んででもこの店のどら焼きを食べたいと思う」と徳江さんが聞いたところ。徳江さんのあんに対する思いが伝わってきて良かったです。千太郎さんの母親と同じで辛い時には甘い物を食べて忘れるのがほとんどなのでそこは共感できました。私はお菓子作りが好きで、チョコレート菓子やホットケーキなど作るのですが、他のお菓子を作ることに挑戦したいです。（3-3）

*3年生は、「つめたいよるに」「謎解きはディナーのあとで」「あん」「僕たちは世界を変えることができない」の4冊のうちいずれか1冊を選ぶ、自由読書を課題とした。

《お知らせ》

※「らいぶらりいにゅーす 2018」という名前で図書館だよりは原則毎月発行しています。事務室に近い方の出入り口近くのホワイトボードに貼ってあります。**新しく入ってきた本の紹介などもそちらで行っておりますのでご覧になってみてください。**

※ リクエストも随時受け付けております（口頭・用紙どちらでも構いません）。

※ **本の寄贈も受け付けております。**「家に読まなくなった本がある」という先生は、図書室まで直接本をお持ちください。職員室の司書の机の上に置いてくださっても構いません。